

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	浅井 良亮（奈良県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第90号
学位授与の日付	平成29年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学位論文題目	有志の時代 －明治維新政治史に関する一試論－
論文審査委員	主査 青山 忠正（佛教大学教授） 副査 渡邊 忠司（佛教大学教授） 副査 山崎 有恒（立命館大学教授）

〔1〕 論文の概要

本論文は、徳川斉昭（水戸徳川家当主、のち隠居）の活動に端を発する「有志大名」の言説や政治的な活動に着目し、それにより、弘化・嘉永～元治・慶応期（1840～60年代）を主な対象としつつ、明治維新期の政治史を、従来の研究とは異なる新たな視点から描き出そうとしたものである。その構成は、次のように、序章以下の5章と終章から成る。

序章 有志大名と幕末政治―「公議」型政治を再考するために

第1章 有志の論理―徳川斉昭の言説を通じて

序

1節 斉昭の志

2節 水戸家中騒動と「有志」

結

第2章 有志の条件―有志大名再考

序

1節 斉昭と宗城の大名評

2節 有志の顔触れ

結

第3章 有志の交流―蘭書貸借活動を事例に

序

1節 蘭書貸借の実態

2節 蘭書貸借の周辺

3節 蘭書貸借の性格

結

第4章 有志の変質—有志か、徒党か

序

1節 有志の自意識

2節 有志の徒党化

結

第5章 異様の有志—島津久光の政治的位置

序

1節 島津宗家に於ける久光

2節 久光と有志

結

終章 有志分裂後の政治社会—元治・慶応期の政治構造

序章「有志大名と幕末政治—『公議』型政治を再考するために」では、政治への参加が限定されていた〈閉鎖系〉の政治社会で展開された「有志大名」の言説や活動の軌跡を追うことで、19世紀を「有志の時代」として描く試みの最初の一步としたい、という本論文の狙いが延べられる。

第1章「有志の論理—徳川斉昭の言説を通じて」では、斉昭の言説を通じて、「有志」の意味内容が検討される。斉昭は、天保4年（1833）、家督相続後の就国（帰国）に際し、家中に諭書「告志篇」を降し、「武士の武士たるゆえん」や「忠孝の大本」を説き、「天祖・東照宮の御恩」に報いようとすれば、まず主君である斉昭自身に忠節を尽すべきことを求めた。その背景には、文政年間（1820年代）から現実化しつつあった海防への危機意識があった。その後、弘化元年（1844）、公儀（幕府）からの圧力により、斉昭が退隠に追い込まれた後の家中騒動において、斉昭は、「国家」のため、主君のため、身命を捨てて忠を尽す者を、「有志」として称揚したのである。

第2章「有志の条件—有志大名再考」では、斉昭と伊達宗城が交わした大名への人物評を通して、彼らが有志大名に求めた条件が、どのようなものであったかが検討される。弘化3年（1846）6月、斉昭（水戸家隠居）は、懇意にしていた宗城（宇和島伊達家当主）に、23名の大名をあげ、彼らが「有志」であるか否かの批評を求めている。最終的には嘉永3年（1850）までに、越前の松平慶永・薩摩の島津斉彬ら11名が「有志」と判定されるが、その主な基準は、家中での文武振興と海防への取り組みの姿勢、さらに国政改革への志向を持つこと、であり、同時に10万石以上の石高を有することが前提とされた。その結果、「有志大名」は外様国持クラスが中心となる。

第3章「有志の交流―蘭書貸借活動を事例に」では、弘化・嘉永期（1840年代）に有志大名の間で熱心に行なわれた蘭書の貸借活動に注目し、彼らの交流の実態を明らかにしている。貸借の対象となったのは、主に軍事技術に関する蘭書であるが、まず所蔵情報の交換、次に貸借の実現、さらに写本の作成と返却、というサイクルを以て完了とされた。蘭書の入手や翻訳にあたっては、徳川家の長崎奉行や蘭学者が、積極的に利用された。こうした有志大名の交流は、彼らの間での情報の共有性や、互助性（情報交換）に基づくが、その一方、外部に対しては徹底的に秘匿された。このような共有・互助・秘匿という特性は、有志大名の活動そのものに付随する属性というべきもので、有志の結合を特徴づける大きな要素である。

第4章「有志の変質―有志か、徒党か」では、安政期（1850年代後半）の政治社会において、有志大名が変質してゆく様相が検討される。安政元年（1854）日米和親条約調印に前後して、有志大名は、諫言思想に基づき、公儀（幕府）に対し、対外問題や将軍継嗣等に関わる上書・建白を繰り返す。また、水戸斉昭自身は、嘉永6年（1853）6月、ペリー来航を契機に、公儀の「海防参与」に登用されていた。こうした経過を通じて、有志大名の間では、自らの言説を「天下有志」と結び付ける、という自意識の肥大化が見られるようになる。その一方、有志大名の中には、斉昭らに対し、冷淡な態度を見せる者も現れた。安政5年（1858）8月、先の通商条約調印を非難する戊午の密勅が降されると、公儀は、それに関わる有志の運動を抑圧するに至り、慶永・宗城・山内豊信ら有志大名の主要部分は隠居・謹慎の処分を受けた。公儀は、彼らの行動を「徒党」として危険視したのである。

第5章「異様の有志―島津久光の政治的位置」では、文久2年（1862）、政局に登場した島津久光（薩摩）に注目し、久光と有志大名との隔たりについて考察している。有志大名の1人、島津斉彬は安政5年（1858）7月、病死した。後継者と目されたのは、異母弟の久光（家督を継いだ茂久の実父）で、久光自身も、そのように自負していた。

安政5年以降、大老井伊直弼によって抑圧されていた有志大名は、井伊の死後、文久2年には政局復帰を果たし、久光も率兵上京を行なって、その存在を天下に示した。しかし、久光の公式的な立場は、島津宗家の「部屋住み」に過ぎず、大名家の隠居や当主とは、大きな隔たりがあった。その隔たりは、久光への官位推任叙をめぐって顕在化し、元治元年（1864）3月、参豫会議の解体に示されるように、有志結合が破綻をきたす伏線となった。

終章「有志分裂後の政治社会―元治・慶応期の政治構造」では、参豫会議の解体後、京都を場とする政治の構造を展望している。上京していた将軍家茂の帰府と共に、多くの諸大名も帰国した。同時に諸大名は、朝廷・公儀（幕府）から距離を置く自律的な態度（いわゆる割拠の姿勢）をとるようになった。これを憂慮した朝廷は、大名への官位昇任叙を進めて、繋ぎとめを図るが、効果は無かった。これに代わって台頭した公家の「有志」が政局を主導し、慶応3年（1867）末、王政復古のクーデターに至る。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文は、当該期の政治史を、「有志大名」への着目という斬新な視点から読み解いたものであり、次のような諸点で、研究史上、評価に値する意義を持つと考えられる。

第1に、これまでの研究において、「有志」あるいは「有志大名」という言葉は、使用例があるものの、その具体的な内容は、必ずしも明確ではなかった。本論文では、これについて、水戸斉昭の「告志篇」を丁寧に分析することにより、家臣のレベルでは、天朝・公辺（朝廷・幕府）の恩に報いるよう、斉昭自身に対して精忠を尽すことであり、その志を有し、実践する者こそ「有志」であるという論理を導き出している。この論理は大名レベルでは、天朝・公辺に、直接働きかけることを合理化するものであり、以下に見る有志大名の活動の論理的な根拠を明確にしたものといえる。

第2に、上のような論理に立って活動する有志大名を、極めて具体的に特定することに成功している点である。その作業は、斉昭と宗城の間で交わされた、個々の大名に関する人物評、という新史料を発掘したことによって成された。このような作業は、それ自体、きわめて根気よく、大量の史料を読みとおすことで、初めて成しうることである。この論述によって、少なくとも斉昭を中心とする有志大名のグループが、どのように選別され、交流関係が形作られていくのか、という基本的な疑問が解決された。また、その人物評を見ると、それぞれの大名が、どのような縁戚関係を持つか、あるいは「海防の役」を勤めているかどうか、さらには年齢や嫡子の有無など、現代で言う個人情報までが、選考の要件に含まれている。そのことは、有志の結合の特性を見るうえで重要な要素をはらんでいるが、著者は、それらの点を、十分に咀嚼したうえで、以下の論述を進めている。

第3に、有志大名の活動と交流の様相を、蘭書の貸借という事例を踏まえ、具体的に明らかにした点である。大名同士の交流自体は、もとより珍しいことではないが、軍事技術に関するオランダ語の原書は、当時において最先端の軍事知識をもたらす情報源であり、彼らが、その相互の貸借により、知識を蓄積し、実地に応用しようとしていたことは、これまでの研究でも明らかではなかった。本論文では、やり取りされた書簡の解釈は言うまでもなく、蔵書目録を史料として利用するなど、綿密な工夫を凝らしながら、その交流の実態を精査し、特に情報の外部への秘匿という点に、有志結合の特性を見出すなど、独創性の高い考察を展開している。

第4に、いわゆる安政の大獄について、大老井伊直弼をはじめとする幕閣が、有志大名を「徒党」とみなして危険視したことに、その発生要因を求める、という新たな見解を提示した点である。従来の研究において、大獄の発生要因は、将軍継嗣問題をめぐる一橋派と南紀派という党派対立にあると目されていたが、これに比して、本論文の議論は、政変としての安政の大獄、という、政治史的な観点に立った議論の深化をもたらすものであり、今後さらなる論点の深まりを期待しうる。

第5に、島津久光の政治的な位置づけを、「有志大名」のなかの異端という、独創的な視角から見直した点である。久光については、専門学界においても近年、注目が集まり、様々な議論が交わされているが、島津家内部の処遇などを含め、大名ではないが、それに近い者と見なされる、という久光の特殊な立場を、「異様の有志」と捉えてみせたのは、一つの卓見といえる。その可否を含め、今後、久光自身はもとより、薩摩藩の動向を含めた幕末政治史に、新たな見方をもたらす糸口となる論点であろう。

本論文では、以上のような諸点に、研究史上の意義を認めうるが、あらゆる論文において完璧がありえない限り、本論文もまた、今後、発展させられるべき課題を有している。その主要な部分を、以下にあげ、参考に供したい。

第1に、有志大名の言説や活動に着目し、それらを明らかにした功績は、それとして、その成果が、当該期の政治構造の変遷や政局動向の理解と、必ずしも結びついていないようである。具体例を踏まえて言えば、つまり、有志大名が、どこでどのように政局に関与し、その結果、どのように政局が進展したか、といった点にまでは、考察が及んでいない。この点は惜しまれるところである。その主な要因は、本論文が、当該期の政治史を考えるにあたり、「有志」・「有志大名」という視点を設定することで、どのような展望が開けるかといった問題関心に立って、手法的には、もっぱら彼らによる言説の分析に重点を置いた結果であろう。ただし、この点は、著者自身も十分に自覚しているところであり、今後、研究を進めるなかで克服されてゆくものと期待される。

第2に、有志大名の交流の実態に関する理解についてである。具体的には、有志大名間で蘭書の貸借が盛んに行なわれていた事実を明らかにした点は、非常に興味深い。これには、さらに空間的な要素を加味して考えるべきではないか。つまり、近世の大名（当主）は、参勤交代制のもと、1年置きに在国・在府を繰り返すことが原則であり、また世子は江戸常住、水戸徳川家は例外的に定府（江戸常住）、佐賀鍋島家は参勤免除であった。したがって、彼らの間の通信連絡や書物の貸借も、互いが江戸にいる期間は容易だが、遠隔地の本拠に戻っている期間は、それほど簡単ではない。大名（当主・世子）の交流は、このような制約を免れないのであり、彼らの交流の実態を論ずる場合、その在国・在府期間を特定したうえで、文献史料を分析する方が、より説得的な議論を展開できるであろう。

第3に、終章での展望においてではあるが、公家の「有志」が、説明抜きで登場するのは、いささか唐突の感を免れない。彼らが王政復古クーデターを主導したとすれば、その性格規定は、当然ながら重要であり、一定程度であれ、そこに論及する必要があるだろう。また、これと併せて、本論文では、「有志」を、もっぱら水戸斉昭の眼から見たものとして捉えているが、斉昭の判定から漏れ落ちた大名の中にも、「有志」はいたはずである。たとえば、当該期の政局において、良かれあしかれ、無視しえない役割を担った長州毛利家は、本論文の視角では、姿が見えない。また、仙台伊達家や米沢上杉家にしても、安政期以来の政局のなかで、重要な分子として活動している事実は、すでに知られていることである。それら、斉昭的な「有志」範疇から漏れ落ちた、国政参加志向を持つ大名及び家臣団を、どのように、政治史の理解の中に組み込むべきかという問題は、研究史上、未だ解決されない課題であり、本論文にとっても、長期的な視野においては、残された課題といえよう。

本論文は、これらの課題を有するとはいえ、それらは、著者が今後、研究を進展させる過程で、克服し、解決することを期待できるものであり、先述した研究史上の意義を合わせ考えれば、論文としての成果を損なうものとはまでは言えない。

以上の諸点を総合し、本論文は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。

以上